あと一口ではなく二口を目指す

根室管内の一頭あたり乳量(乳検)は、平成８年 7,715kg から平成 ２７年には 8,793kg へと、20 年間で 1,078kg 向上してきました。牛に一口でも多くの飼料を採食させる視点に立ち、既存施設に手を加えることで乳牛の乾物摂取量が高まり、乳量向上に寄与した農場も多く見られました。日頃の皆様方の努力が実を結んできています。

近年、根室管内は計画的な草地更新などによる植生改善についても、農協単位で取り組みが行われており、粗飼料の品質向上につながっています。せっかく作った粗飼料を余さずに食べさせることが求められます。

また、様々な飼養形態での営農が行われるようになり、搾乳ロボットを導入する農場も出てきています。給与された飼料をあと一口、いや二口食べさせることで、まだまだ根室管内の乳量は伸びる可能性を持っているのです。

そういう中にあって、乾物摂取量を確保する視点にたった技術が重要となっています。根室管内の次のステップにむけて、「あと二口食わせる」技術がカギとなります。
そのため、今回の改善資料は、「あと二口食わせる技術　～あなたの牛は　もっとたべられるはず～　」を取り上げました。

第Ⅰ章では乾物摂取量について再確認するため、なぜ乾物摂取量が重要かということと、十分食べている目安について示します。第Ⅱ章では乾物摂取量を大きく左右する３つの要因(牛側、環境、人的)について、１つずつ詳しく示します。それを受けて、第Ⅲ章では「乾乳」、「繋ぎ飼い」、「フリーストール・ミルキングパーラー」、「搾乳ロボット」の飼養形態ごとに、乾物摂取量を高める重要なポイントを見開きで示し、地域の優良事例を交えて紹介します。

この冊子が皆さんの飼養管理に少しでも役立てるなら幸いです。